
バカと謎と記憶消失

負け組み

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと謎と記憶消失

【NZコード】

N3418V

【作者名】

負け組み

【あらすじ】

文月学園に転入する前の記憶を失ってしまった 崎富幸太郎 本人は自覚していない不幸体質のせいいろいろなトラブルに巻き込まれながらも、自分の過去の記憶を探す幸太郎は、どのように変わっていくのだろうか。

オリジナルキャラクター紹介

崎宮幸太郎 ··· 性格は普通。本人は自覚していないが、不幸体质。友のことを誰よりも考えている。記憶消失で、文月学園に入るまでの記憶を一切覚えていない。友をバカにされるとすぐさま殴りかかる。明久たちとは、親友同士。常に、木刀とエアガンを持している。時々、どんなことをしてかすときがある。料理は得意中の得意。

崎宮浩一 ··· 幸太郎の父。性格は普通。料理は苦手。運動はあまり好きではないが、頭がとてもいい。海が好き。理由は、若い女の水着姿が見られるとのこと。幸太郎の過去を知る人物の一人。

崎宮麗華 ··· 幸太郎の母。幸太郎のよき理解者。浩一が余計なことをすると、折檻を行い黙らせる。幸太郎の過去を知る人物の一人。

幸島流下 ··· 性格はやんちゃ。幸太郎をだれよりも愛している人物。島田美波と、姫路瑞希をライバル視している。幸太郎をみつけると、すぐさま飛びつこうとする。だが、いつもかわされて頭を悩ませている。人の気持ちがよくわかり、いろんな人の相談相手になっている。幸太郎の過去を知る人物の一人。

拓馬勝利 ··· 性格は坂本雄一とほぼ同じ。なので、雄一とは気が合う。運動がとても好きで、運動場を50周するほど。怒ると、何をしでかすかわからない。幸太郎の過去を知る人物の一人。

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

初めて投稿しました
キャラの設定をどうしようかと迷っていたところ、うちの友達が乱入してきて勝手にキャラを作ってしましました。
これからもオリキャラをどんどん追加します。
できれば感想などもください

第1話 僕とバカとFクラス

俺の名前は、崎富幸太郎。みんなは幸と呼んでいる。いきなりだが、ハーレムは好きか？俺は大好きだ！

朝4時

「・・・なんだ、こんな時間に起こされなきゃならんのだ・・・」

「いいから、いいから、いいものを見せてやるよ」

「俺、今日から学校に行かないといけないんだからもう少し眠らせてくれよ・・・」

今、俺は父ちゃんに無理やり起こそられて父ちゃんの部屋に連行されている。・・・なぜ？そんなことは知らん！

「で？いいものってなんだよ・・・眠いんだからちやつちやと見せろ！今何時だと思っている！朝の4時だぞ！？今、父ちゃんが起こさなければ夢の中で女達のハーレムが実現したのに！－かえせ！俺の貴重な時間を返せ！ついでに女達を連れて俺の夢だったハーレムを実現してみる！」

くそ！このくそジジイめ！あとで、木刀で叩きのめしてやる－－

「まあ、まあ、いいものとはこれだ！－どうだ！－すごいだらう－！」

－

「－」これは・・・ただのエロ本じゃねえか！－－なにが「どうだ！」－「すげー」こだらう！「だ！思いつきり期待はずれじゃねえか！－畜生－！」

このじじいは、エロ本を見せたいがために俺を起こしたのか！－このくそじじい！後で覚えてろ！

「さあ、息子よ！一緒にこの大人の階段を登るために教科書を読もう！」

「やのまえにトイレにいかせてくれ」

「のじじいを母ちゃんにばらしてやる・・・－せいぜい痛い目にあつ

てもううんだなーー

母ちゃんの寝部屋

「母ちゃんーおきてくれー！」

「ん・・・なによ・・・せつかく気持ちよく寝てたのに・・・」

「母ちゃんーうちの父ちゃんが」

「またあの人なんかやらかしたのーーありがとう幸ー早速折檻しにいってくるわー！」

物分かりがよくて助かつたよ。生きて帰れよー父ちゃん！

こうして、崎古家の朝は、騒がしく迎えた。

朝7時

「はあ・・・ぜんぜん眠れなかつた」

あのあと、何度も寝ようと心がけたが、結局眠れず、学校に行く時間が来てしまった。ついでにだけど、あのあと、あのくそジジイは白田をむきながら泡を吹いてリビングに倒れていた。それについては、自業自得だと思つ

「幸、そろそろ学校いつたら？」

そんなくそジジイを見てもなんとも感じてなさそうな母ちゃんは、ある意味すごいと思つ

「じゃあ、行つてくるわ」

こうして俺は、2年田の学園生活のスタート地点へと向かった。スタート地点とは、もちろん教室だ

「幸、いつもより遅いぞ！」

玄関の前でドスの聞いた声に呼び止められるなんだ?と思い、声のしたほうに田をやると、浅黒い肌をした、アリじやなくて西村先生がいた

「おはようございます。鉄じ

西村先生」

いけない、いけない、こつもの癖で鉄人って呼びそうになつた。ち

なみに、鉄人とは、西村先生のあだ名だ。趣味がトライアスロンというところからきたらしい

「いま、鉄人って呼ばなかつたか？」

「気のせいです」

「そうか。さつそくお前にプレゼントだ」

そういう、鉄人は封筒を差し出した。表には、崎宮幸太郎と、でかでかと書いてあつた

「なんですか？これ」

「このまえの、振り分け試験の結果通知だ」

振り分け試験とは、点数によってクラスわけをする試験である。点数が低ければ、その分設備のひどい教室で勉強をしなくてはならぬし、点数がいい人は、設備の整っている教室で勉強できるというわけだ。クラスは、AからFまである。なんとしてでもFクラスだけはまぬがれたい。そう思い、封筒を開けた。中には紙があつた。早速見てみるとじよう。俺の成績だと、DかEクラスあたりかな？期待を胸に躍らせ、紙に書いているところを見た。そこには、こう書かれていた。

「崎宮幸太郎・・・Fクラス」

こうして俺の最低クラス生活は始まつた。

第1話 僕とバカとFクラス（後書き）

最初、何を書こうか迷ったけど何とかここまでかけました。次の話は、明久たちを出したいと思います

バカと美少女と試召戦争

第一問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

「^{（1）}得意なことでも失敗してしまつ」と

「^{（2）}悪いことがあつた上にさらに悪いことが起きる喻え」

姫路瑞希の答え

「^{（1）}弘法も筆の誤り」

「^{（2）}泣きつ面に蜂」

教師の「メント

正解です。他にも^{（1）}なら「河童の川流れ」や「サルも木から落ちる」、^{（2）}なら「踏んだり蹴つたり」などがありますね。

崎富幸太郎の答え

「^{（1）}サルも地獄に落ちる」

「^{（2）}泣きつ面にパンチ」

教師の「メント

あなたは悪魔ですか。

土屋康太の答え

「^{（1）}弘法の川流れ」

教師の「メント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

「△△△ 泣きつ面蹴つたり」

教師のコメント
君は鬼ですか。

「はあ・・・・なんで俺がFクラスなんだ・・・」

俺は今、Fクラスの教室に向かっている。せめてEかDクラスの方がましだったが、何でよりによつて馬鹿達が集まるFクラスなんだ・・・? 納得がいかない!

「ん? なんだ? このばかでかい教室は・・・」

3階に着いてすぐ目に移つたのが、Aクラスの教室だつた。

「何で学費は同じはずなのにこんな豪華なんだ! ? これは一種の差別だ! 訴えてやる! 」

・・・と、威勢よく言つたのはいいが、ここでこんなこと口走つても何も変わらぬわけじゃないし、さつさとFクラスに向かうとするか。

二年F組

「・・・」

一瞬俺は言葉を失つた。何だこの設備の酷さは! ? Aクラスとは天と地ほどの差ではないか! ? ここはどこかの廃屋か! ? 反乱ものだぞ

! 畜生!

俺は、教室の中をじっくりと眺めた。

かび臭い教室

ぼろぼろの卓袱台

綿がほぼすべて抜けている座布団

教壇にあがつている雄二

・・・ん? 雄二?

「おい、雄一。何そんなところで突っ立つてんだよ」

「こいつは、坂本雄一。文月学園に入つてからの悪友だ。中学のころは悪鬼羅刹と呼ばれるほど強いらしいが、俺には関係ない。ちなみに、俺の中では雄一は敵に回したくない奴ナンバー1だ。

「先生が遅れるらしいからな、代わりに俺が教壇に上がつてみた」

「代わりについて、雄一が？ 何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

最高成績者とは、それぞれのクラスの中で一番点数が高い人のことをいう。まあ、そのまんまの意味だ。

「そうゆうことか。これからもよろしく頼む雄一」

「おう！ まかせとけ」

「さて、どこにすわればいい？」

「どこでもいいらしいぞ」

・・・さすがFクラスと言つたところだらう

「じゃあ、あの席に座らせてもらおう」

「うう、俺は一番後ろから2番目の席に座つた

座つた後、何分か過ぎたころに3人、俺のところに来た

「おぬしは、幸ではないか。幸もFクラスじゃつたのか？」

こいつは、木下秀吉。外見だけを見れば女の子にしか見えないが、戸籍上では男らしい。ざんねんだ。こんなかわいい奴が男だなんて・・・きっとこれは間違いに決まつてゐる、そう願いたい。それにしても、かわいいな・・・

「ああ、俺もFクラスなつちましたんだ。これからもよろしく。あ、そうだ。優子にもよろしくといつといてくれ」

優子とは、秀吉の姉である。始めてあつたときは、「何！？ 秀吉そつくりの奴がいる！ もしかしてクローン技術はここまで進歩していたのか！？」と、驚いた。その後、優子に関節技をくらい意識を手放してしまつたが・・・一応、俺と優子は同じ年だ。

「任せたのじや」

そういうつて、秀吉は自分の席に戻つた。か、かわいい・・・

「あら、幸もここにいたの？」

「いっは、島田美波。すらりとした足、ポニー・テール、ペッシュタン口の胸を持ち合わせた美少女である。正直に言ひ。俺は貧乳が大好きだ！」

「お、美波か。今日も胸がペッ・・・タン・・・！」

「頸動脈が・・・」

「幸？今なんか言った・・・？」

「な・・・何も・・・いつて・・・ないです。だから・・・頸動脈から・・・手を離して・・・！」

「今度いつたら命がないものと思へなさいー。」

「了解です」

お、おそろしや・・・女つてものは怖いな。つかつにしゃべつたら今度こそ命がなくなるぞ・・・

呼吸を落ち着けた後、不意に後ろから呼んでいたような感覚がした。振り返ると、そこには土屋康太こと、ムツツリーニがいた。ムツツリーニという名前の由来はムツツリスケベから来ている。

「・・・幸も、ここにいたのか？」

「ああそうだ。それと聞きたいことがあるんだが

「・・・？」

「　　その手に持つている盗聴器をビームに仕掛けるつもりだ？」

「・・・！！・・・気にするな」

いや、気にするなどいわれても・・・無理だろ

「じゃあ、その盗聴器を何に使つもりだ？」

「・・・何にも使わない」

うそつけ

「・・・まあ、いい。これからもよろしく。」

「・・・よろしく」

お互い硬い握手をした後、廊下から足音がした。他にもくるのか？
後は誰だろう

その足音の主が教室に入ってきた。

「すいません、遅れちゃいましたっ！」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

・・・いきなり罵倒か。流石は雄一といったところだろう

今、罵倒されていたのが吉井明久。俺の悪友の一人だ。明久は、観察処分者という称号を受けている。観察処分者とは、学習態度、学習意欲が足りない問題児に与えられる処分だ。ただし、観察処分者の召喚獣は、他の召喚獣とは違い、物に触れることができる。他の召喚獣が触れるのは相手の召喚獣だけだ。だが、物に触れるといつても、生活が楽になるわけではない。観察処分者は、召喚獣が受けたダメージをフィードバックで召喚者自身にもダメージが加えられる。決して楽になるわけではないのである。あと、観察処分者を簡単に言うと、「バカの代名詞」だ。

「・・・雄一？何やつてんの？」

「先生が遅れるらしいから、代わりに俺が教壇に上がつてみた」

「代わりつて、雄一が？何で？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄一がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

・・・明久の心が丸見えだ。おそらく、あいつはこつゆう風に思っているのだろう。「雄一を説得すればこのクラスを動かせる」そう思つてゐるのだろう。確かに一理あるな。

「これでこのクラス全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返つて床に座つてゐるクラスメイト達を見下ろしてゐる雄一

・・・いやな感じだな

「えーっと、ちょっと通してもらえますかね？」

明久の後ろから霸氣のない声が聞こえた。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貰相な体に着た、いかにもさえない風体のオジサンがいた。どうやら先生らしい。

「はい、わかりました」

「うーつす」

明久と雄一は、俺の後ろの席に座った

「えー、おはよつじぞいます。一年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします」

福原先生は黒板に名前を書い「う」として、やめた。・・・何回も「うが本当に酷い設備だな。チヨークすらまともにないよ・・・

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか?不備があれば申し出てください」

「おおありじやあ!!ばかやるう!!

「先生、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです」

俺は早速不備を申し出た

「あー、はい。我慢してください」

あんたそれでも教師かい!?泣いてやる!泣きつくしてやる!!

「あれ?幸もFクラスだったの?」

すると、後ろから明久が話しかけてきた

「ああ、これからもよろしくな明久」

「」ちからこそ

明久と話している間も不備の申し出がたえなかつた

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください

」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの至急を申請しておきましょう」

・・・本当に酷い設備だ。いずれ、反乱が起こつてもおかしくないな

「必要なものがあれば極力自分で調達するよつにしてください」

先生、それは簡単に言うと自給自足つて言う意味ですよ?意味わかつてます?

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

さて、恒例の自己紹介タイム!さあ、最初は誰でしょう?

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

おーっとー最初は、戸籍上では男だが女と間違われるほどかわいい秀吉だあーーいやあ、いつ見てもかわいい・・・

「 と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」「さへさて、お次は誰でしょーうーー

「・・・土屋康太」

お次は、マッシリでスケベなナイスガイの男子、マッシリーーーだあーーここのだけの話、マッシリーーーは自分が経営しているマッシリ商店会とこゝもの立ち上げてるそつだ。俺もあいつの店の会員になつと。

さて、お次はーー！

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

うおおおおおーー究極のペッタン胸を持つ美波だーーヒヤツハアーー！

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は

「 きつと、究極のペッタン胸を持っている美波だーーきつとかわいい趣味をしているはずだ！」

「 趣味は、吉井明久と崎富幸太郎を殴ることです！」

・・・なんと恐ろしい趣味を持っているんだ。俺はかまわないが、明久がものすごいおびえてるぞ・・・？

「はるはるー」

「・・・あ、島田さん」

「まで、なぜその中に俺まで入ってるんだ？」

「ついでつきのお返しよ」

やばい、美波の後ろからドス黒い殺気が渦巻いている・・・

「さ、さあ、次行こーーーーーって、次俺か」

さて、やつぱりここはスタンダードな自己紹介を・・・

「えー、俺の名前は崎富幸太郎。気軽に幸、太郎って呼んでくれて

もかまわない。焼きそばが大好きだ。ついでに言うと、俺と優子は

同じ年関係で

おいまて、みんななぜ俺にカッターを向ける。

それに何でそんなに持っているんだ！？明久！何とかし

おい

！お前まで俺を殺すきか！？」「

ちつ！今日は何もないと思つて木刀とエアガンは家においてしまつた！くそ！どうすれば・・・

「だまれ、裏切り者！僕は他人の幸福が誰よりも嫌いなんだ！！」

「・・・明久、もし俺に攻撃してみる。そのときは

「はつはつは！何言つても攻撃はやめない！！」

「お前の好きな人を放送で学園中に広めてやる」

「みんな！カッターをしまうんだ！」

「だが、このままこいつを野放しにしていいのか！？」

「そうだそうだ！？！」

「また今度ハつ裂きにすればいい！それまで力をためておこひ

「「「・・・ちつ」」

ふう、なんとか難は逃れたな

「いまは、自己紹介の時間です。静かにしてください。次の人、お願いします」

そこで、福原先生が注意した。遅すぎるよ？注意するの・・・

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に「ダーリン」と呼んでくださいね！」

「「「「ダーリー...リイー...ーン...」」」

・・・胃液が逆流しそうだった。それにしても気持ち悪すぎぬ。にどにこんな悪ふざけはよしてほしいぞ・・・

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひ致します」

どうやら、明久も胃液が逆流しそうになつたらしい。後ろで明久が口に手を当てている。その気持ちわかるけど・・・つこせつきの件もあるから自業自得つて奴だ

そのあとも、自己紹介が淡々と進むだけだった。そして、眠くなり

始めたころ、教室のドアが開いた

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「「「えつ？」」

みんなが驚いた顔をしている。そりやそつだ。Aクラス並の成績を持つ姫路さんがここにいるはずがない。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

いま、自己紹介していたのは姫路瑞希さん。せいせきは、Aクラス並の成績だ。だがなぜそんな彼女がここにいるのか、それは聞いてみないとわからないな。ちょっと質問してみるか。

「はい、質問です。なぜ、姫路さんはここにいるのですか？」

これはみんなの疑問だ。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路さんが口を開く。ふむ。小動物みたいだ。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

その言葉を聞き、Fクラス全員が「なるほど」という顔をした。そのあと、あちらこちらから言い訳が続出。

「そう言えば、俺も熱への問題が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

・・・ばかばっかりだ。なんでこんなバカの集団のところに来たんだろう・・・

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように明久と雄一の隣の空いている卓袱台につぶつする彼女。「うむ。ほんとに小動物みたいだ。かわいい・・・

「え、緊張しましたあ・・・」

席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す姫路さん。これはチャンスだ!!」ここで話しかけて仲良くなり、そして結婚まで一直線だ!!

「あの[さ]、姫 」

「姫路

そこで雄一の邪魔が入った。畜生!後で覚えてろ!斜め後ろを見ると、明久も話しかけようと横へ体を卓袱台から出すも雄一に邪魔されて落ち込んでいる。明久、がんばれ

「は、はいっ!何ですか?えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄一。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

「あのさ、姫 」

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか?」

「おのれ!また邪魔をするきか!!

「あ、それは僕も気になる」

明久!お前までも俺の恋路を邪魔しにきたのか!?許さん!――

「よ、吉井君!??」

・・・なんだろう。明久って、そんなに嫌われてるのか?いや、そ

んなはず

「姫路。明久がブサイクですよん」

「雄一、それはフォローしているとは言わないぞ!!あ!今の一言で

明久が精神的に崩壊しそうになつてゐる!!

「大丈夫か!?明久!!!」

「・・・あ、幸か。ありがとう、僕の味方は幸しかいないよ・・・」

畜生!雄一!明久の変わりに俺が正義の鉄槌を食らわせてやる!!

そのとき、姫路さんがあわてて口を開いた

「そ、そんな!目もパツチリしてると、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ・・・」

「よかつたな!明久!外見をほめられたぞ!しかも姫路さんに!」

「ううう・・・やつぱり僕の味方は幸しかいないよ・・・
すると、雄一が口を開いた

「そういうわれると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもし
れないな。俺の知人にも明久に興味を持つていてる奴がいたような気
もするし」

よかつたな！明久！他にもお前の外見をほめてくれている奴がいた
ぞ！！

「え、それは誰」

「そ、それって誰ですかっ！？」

明久の声を覆いかぶさるように姫路さんが同じようなことを質問し
た。さすが、女の子だけあって、じゅう手の話には敏感だね

「確か、久保

「久保？久保つてまさか・・・！」

「利光だつたかな」

久保利光＝男

「雄一、それ以上言つたら明久の精神が崩壊してしまう！おい！起
きろ明久！！」

「・・・もう僕、お婿にいけない」

「だいじょうぶだ！そんな変態が来ても俺が追い払つてやるから！
頼むから目を覚ましてくれ！！」

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？残り半分は？」

「そこで声をそろえて質問するな」

「だつて、気になるじゃないか。ねえ？幸？」

「ああ」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平氣です。」

「綺麗に無視するな！」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

そこで、先生が教卓を叩いて注意してきた

「あ、すいませ」「

バキイツ バラバラバラ・・・

突如、先生の前で教卓がごみ屑と化す。・・・本当に酷い設備だ
「えー・・・替えを用意してきます。少し待つていてください」
気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行つた。ほんと
酷いなこのクラスの設備。そういうえば、この言葉何回目かな？

「あ、あはは・・・」

姫路さんが苦笑いしている。そりやそうだ。いきなりこんな酷い設
備の中で勉強するのだからな。こんかいは、姫路さんに同情の涙を
ささげずにはいられない。

「・・・雄二。ちょっとといい？」

そのとき明久が雄二に声をかけた

「ん?なんだ?」「

「ここじゃ話しくいから、廊下で」

話しくいこと?どうゆう内容なんだろう。

「別にかまわんが」

そして、明久と雄二は廊下に出て行つた。出て行く途中、明久と姫
路さんの目が合つた。くそ！羨ましい限りだ！

しばらく、姫路さんと雑談をしていると、明久と雄二が戻ってきた。
その後に福原先生も戻ってきた。

そのあと、残りの人たちの自己紹介も終わつて、最後は雄二ただ一
人になった

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ

「了解」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ

「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね?」

福原先生に問われ、鷹揚にうなずく雄一。まあ、別に由慢でさる」とじやないけどね。

それにもかかわらず、雄一は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺らのほうに向き直った。

なよつこ呼んでくれ

「もう一回呪ひておくれ。別に血穢じれる」とドクターはいふ
「わたくしは聞いておきたい」

さたい

さすがは、神童と呼ばれていた雄一だ。間の取り方もうまい
皆の様子を確認した後、雄一の視線は教室内の各所に移りだす
釣られて俺らも雄一の視線を追い、それらの備品を順番に眺めてい
つた。

いが
」

「不満はないか？」

Fクラス全員の魂の叫び。すばらしい！俺もその魂の叫びの中に入

「どう? 僕だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いてる

要求する!」

おもをもひかまつたて同じ立場が空のあいに差が大きくなる

戦友たちの反応に満足したのか、自信にあふれた顔に不敵な笑みを浮かべて

「これは代表としての提案だが

これから戦友となる仲間達に野性味満天の八重歯を見せ、

「FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛けようと思

う

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引き金を引いた。

バカと美少女と試召戦争（後書き）

結構長くなつてしまひました。次は試召戦争／試験召喚戦争の話
を書きたいと思います

試召戦争と謎の記憶

試召戦争（試験召喚戦争）とは、（試験召喚システム）を使い、自らの姿を「ティフォルメされた（召喚獣）」を使い、テストで取つた点数で戦う戦争のことを指す。「」の戦争で勝つと、お互いの施設を交換できる。ただし、自ら宣戦布告をして負けたら、一クラスぶん設備が下がってしまう。例に挙げると、BクラスがAクラスに宣戦布告をして勝つとお互いの設備を交換することができる。

もう一つ例に挙げると、FクラスがDクラスに宣戦布告をし、負けるとFクラスの設備がさらに酷くなると、ijiの風な感じだ。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんていやだ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

・・・今、姫路にラブコールかけた奴。あとで明久と一緒に成敗してやる。顔はちゃんと覚えたから覚悟しろ

確かに今の俺達じゃあ、Aクラスには絶対といつても過言でないほど勝利の見込みがない。だが、そんな状態でも勝てるといつている雄一はAクラスに勝つための作戦があるに違いない。そんな作戦がなくAクラスに宣戦布告をするほど雄一はバカじやない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」
雄一は、そう断言した。今の雄一はとても気合が入っている。相当勝つ自身があるのでない。

「何を馬鹿なことを」

「何の根拠があつてそんなことを」

否定的な意見が教室中に響き渡る

「根拠ならあるさ。」のクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃つてこる

勝つことのできる要素 ね・・・

「いつたいその要素は何だよ。早く教えてくれ」

俺はじれったく雄一に質問した

「まあ、そうじれったくするな。今から説明してやる」

そういうと、得意満面な顔を見せ、ある一人の男に目をやる

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に

来い」

「・・・!!（ブンブン）」

「は、はわッ」

相変わらず、すこ下心だ。まさかそこまでやるとは・・・おそるべし

「土屋康太。こいつがあの有名な、ムツツリーーだ」

土屋康太という名前は知れ渡っていないが、ムツツリーーという名前だけは別だ。男子生徒には畏怖と敬畏を、女子生徒には軽蔑を以つてあげられる

だが、さすがに島田と瑞希さんは、聞いたことは無いようすで、頭の上に？マークが出ている

「ムツツリーーだと・・・？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？」

「だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・」

ムツツリーー、覗いた跡を必死に隠さなくとも、その行動だけでお前がスケベということが丸わかりになるだけで、むしろむなしいくらいだぞ・・・

「姫路のことは説明する必要もないだろ。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えつ？ わ、私ですか？」

姫路さん、それ以上そんな小動物みたいな行動をとられると俺の理性が危うくなる・・・！

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

たしかに。姫路さん以上の点数を持っているひとはAクラス代表ぐらいしかいないしな

「木下秀吉だつている」

秀吉は、学力ではあまり名前は聞かないけど、ほかの事で有名だつたりする。演劇部のホープだと秀吉そつくりの姉だとか・・・実際に会つてみたいな。今度秀吉に頼んでみるか

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやつてくれそうな奴だ」

「坂本つて、小学生のころは神童とか呼ばれていなかつたか？」

「それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だつたのか」

それはありえない

「実力はAクラスレベルが一人もいるつてことだよな！」

たしかに、これだとAクラスとも互角に渡り合えるかもしぬれないな

「それに崎富幸太郎もいる」

・・・シン

・・・心が根元からへし折られそうだ

「おい！！何でそこで俺の名前が出てくるんだよ！！俺はいつも普通に生活しているはずだぞ！！」

「いいじやなか。それに、あのことをずっと隠し通せるとも思つていたのか？」

やばい。冷や汗が・・・！

「ま・・・まさか・・・アレを言つのか・・・？」

「ああ！もちろん包み隠さず暴露する」

「酷！」

「」このあだ名は「記憶消去者」だ

・・・ほんとに言つちゃつたよ」

俺はどうやら、こいつかはわからないが人の記憶を抹消することができないよくなつてていたらしい。なぜそんなことができるかはわからないが、俺がコイツの記憶をここからここまで消したいと頭の中で念じ、そしてその記憶を消したいと念じた人に触れるとその人の記憶が抹消されるという、世にも不思議な能力である。このことは、一部の人と家族しか知らない。その一部というのが雄一なんだが・・・・そのあだ名つてもう広まつていてるの？

「馬鹿な！そいつがその「記憶消去者」なのか！？」

「そんな！そいつがここにいるなんて・・・幸！後で握手を…（これで、彼女にふられたことを忘れることができる…）」

「また！俺が先だ！（俺が先に記憶を消去させてもらひつー）」

お前らの考えていることが丸見えだバカ・・・それに、もつお前ら女に振られたのか？ずいぶんどこ苦労なこつた

「幸。ずいぶんと人気なようだな。よかつたじやないか

「はあ・・・あまりばらしたくなかったんだがな・・・」

そのとき、姫路さんと美波が話しかけてきた。小声で。

「（あの、幸君。ちょっとといいでですか？）」

「（ん？なんだ？美波まで・・・なるほど。やうやくひとか）」

「（なによ、ニヤニヤしちゃつて・・・）」

「（おまえらは、俺にこいついたいんだりつ。「明久君に恥ずかしい」とこいつを見られたから）のとこだけ記憶を消していくださー」と）

「（…?）」

「（だてに「記憶消去者」といわれてなこと）だ。それに、お前らが明久のこと好きだつてことはひとつくわかつていてる」とだからな）

「（…で？幸は）のお願いきてくれるの？）」

「（却下だ）」

「（…一応理由は聞かせてもらひつわよ）」

「（なんでだめなんですか！？）」

「（なんでつて、そんな卑怯な手で明久を振り向かせようとこいつと

「うが氣に入らんからだ」

「（・・・）」

「（もう、これで俺からの話は終わりだ。明久のことを本氣で好きだつたら、実力で振り向かせろ。）」

「（・・・わかつたわ。がんばってみる）」

「（わかればいい。姫路もがんばれ）」

「（・・・はい。がんばります・・・美波ちゃん・吉井君のことは絶対渡しませんからね！）」

「（その言葉、そのまま返すわー！絶対負けるものですかーー）」「なに話してたの？幸？」

「・・・ほんとにお前、愛されてるな・・・羨ましいぞ・・・！」「え？何へんなこと言つてゐのを！僕は誰にも愛されぬよつた男じやないよ？」

「・・・美波と瑞希もくわいじてるんだな・・・」

「・・・ええ」

「へ？何言つてるんだよ？幸、教えてよ」

「・・・お前が鈍感とこつことだ」

「？？？」

「こいつは・・・ビンだけ鈍いんだ！？あきれても出せないぞー！」

「・・・わんそろ話していいか？」

雄一が、やつと話が終わつたかとこつ顔で言つ

「ああ、いいぞ」

「じゃあ、続きを言ひ。ほかにもAクラスに勝つための要素を持つてこるやつがいる」

「ふむ。そいつはだれだろ？まさか、明久だとか言わないよ

「せいつの名前は、吉井明久だ」

ほんとに言つとは思わなかつた

試合戦争と謎の記憶（後書き）

変なところで止めてしません！

今日はちょっと出かける用事があったので・・・

それにも、だんだん幸の性格がキャラ紹介のときと全然違つとうな感じになつていてちょっとあせっています。

できれば気にせず読んでくれたら助かります。

感想をお待ちしております

試合戦争と謡の記憶 やのへ（漫畫）

試合戦争と謡の記憶の続刊です

試召戦争と謎の記憶 その2

「ちょっと雄一。どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー。まったくそんな必要はないよね！」

「誰だよ吉井明久つて」

「聞いたことないぞ」

「吉井つて、あのバカの代名詞である「観察処分者」って呼ばれている奴じやないか？」

あつ、今明久にとつて致命的な発言をしてしまつた。むにゅうで明久が冷や汗をものすごい出してるぞ

「そうだ。こいつは、観察処分者と呼ばれている。」

そして、それを肯定する雄一

「肯定するな、バカ雄一！」

残念ながらあつてるぞ、明久。

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが小首を傾げている。ここは説明したほうがいいかな？
「そこは俺に説明させてもらひつ。まあ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうた類の雑用を、特別として物に触れるようになつた召喚獣でこなすといった具合だな。」

「そなんですか？ それつて凄いですね。試験召喚獣つて見た田と違つて力持ちつて聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「あはは、そんな大したものんじゃないんだよ」

たしかに、そんなに大したものじゃない。観察処分者の召喚獣は、物に触れることができるのは確かだが、それは、召喚フィールドが展開されているときだけだ。召喚フィールドが展開されていないところでは召喚できないから、ほぼ、その能力はここ文月学園にいるときしか役に立たない。それに、観察処分者の召喚獣は、召喚獣が受けた負担は約3分の1は召喚者が受けることになる。便利になる

つてわけではない。

「おいおい。『観察処分者』ってことは、試合戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?」

「だよな。それならおいそれと召喚できないやつが一人いるってことになるよな」

バカの癖によくわかつたな。まあ、こんなことに気づかない奴は明久以上のバカだな

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

酷い言いわれようだな、明久。

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言つべきところだよね?」「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すげえ大胆に無視された!」

ここからを見ているとコントを見ているようで実に面白いな。そこが、雄二と明久の面白いところだな。

「皆、この境遇は大いに不満だろ?」

「……当然だ!……」

「ならば全員筆を執れ!出陣の準備だ!」

「……おおーーっ!」

「俺達に必要なのは卓袱台ではない!Aクラスのシステムデスクだ!」

「……うおおーーっ!」

「お、おー・・・」

姫路さんが小さく拳を上げた。ものすごくかわいい……そんなかわいい子に愛されている明久は羨ましい……!

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもうつ。無事大役を果たせ!」

「……ねえ、今字が違くなかった?それに、下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭つよね?」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思

つて行つてみる

嘘だな、絶対。

「本当だ？」

「もちろんだ。俺を誰だと思つている

悪鬼羅刹、神童と呼ばれていた奴で、翔子という人の恋人「雄一」は認めていない)で、悪巧みをすると右に出るものはない奴

「・・・幸。今、むしょつにお前を殴りたくなつたんだが、なんか変なこ」

「気のせいだ」

「そ、そうか。ならいい」

相変わらず勘だけはいいな

「わかつたよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

「ああ、がんばって逝つて来い」

「幸、今字が

「気のせいだ」

「そ、そう?なら行つてくれる」

明久も時々勘がいいときがあるな

「騙されたあつ!」

明久があちこちにあざを作つて戻つてきた。ふむ・・・

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ! やつぱり使者への暴行は予想通りだつたん

じやないか! しかも幸まで何言つてるの! ? 僕は悲しいよ・・・」

「すまん、明久。今日は木刀とかエアガン持つてくるの忘れたからあまり行きたくないなかつたんだ」

これは本当だ

「・・・まあいいや。今度いつかうつきがあつたら、一緒に来てよ。それで許すから」

「さすが明久だな。よし、その条件飲んでやる

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが明久の体を心配している。・・・なんて優しいんだ・・・！俺もああゆう風な彼女がほしい・・・！

「あ、うん。大丈夫。ほんとかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

いつもは明久に暴行を加えている島田さんが明久のことを心配している・・・意外と優しいところがあるなんだ

「平氣だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かつた・・・。ウチが殴る余地はあるんだ・・・」

前言撤回 やっぱり島田さんは暴力少女だった

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

明久・・・今回は流石に同情の涙を流さずにはいられない

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行つぞ」

そういうて、雄二は扉を開けて外に出て行つた。もつ少し友達をいたわるというものを勉強したほうがいいと思う。そのまえに、雄二は明久を友達と見ているのかが疑わしい・・・

「あの、痛かつたら言つてくださいね？」

そう告げて、姫路さんは小走りに雄二の後を追つていつた。本当に優しいな、姫路さん。

「大変じゃったの」

秀吉が、明久の肩を叩いて廊下に出る。やっぱ男としてはどうしても見えない

「・・・『サスサス』」

自分の頬の辺りをさすりながらムツツリー二が続く

「ムツツリー二。覗いていた時の畳の後ならもう消えてるよ？」

「・・・！『ブンブン』」

「おい、ムツツリー二。今更否定されても、ムツツリー二がHなの

は知ってるからな？」

「・・・！『ブンブン』」

「うううまあでばれているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思

う

「同感だ」

「・・・・・「ブンブン」」

「何色だった?」

「みずいろ」

即答か。

相変わらず凄いな、ムツツリー。

「やつぱりムツツリーはこうこうな意味で凄いよ」

「・・・・・「ブンブン」」

そうやってのんびりと教室内で話をしていると、

「ほら吉井。幸も、来るの」

ぐいっと、明久の腰を、俺の首をわじづかみにされ、引っ張られていく。

「ぬお!…首を鷲掴みにするな!!俺が何をしたというんだ!!?」

「なんとなくよ」

この暴力少女め・・・!

そのあと、まあちょっといろいろな話をしながら屋上にこいつたんだけど、そのときの話は原作を!

「明久。宣戦布告はしてきたな?」

「一応今田の午後一回戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ついてことね?」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べろよ?」

「? ? ? まともなもの? ふつうに弁当を食っているんじゃないのか?」

「そう思つならパンでもおじつてくれるとうれしいんだけど」

「えつ? 吉井君つてお昼食べない人なんですか?」

「そうなのか? 明久」

「いや。一応食べるよ」

「・・・ あれは食べているといえるのか?」

「雄一は何を言つてゐるんだろう?」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って 水と塩だらう?」

「は?水と塩が主食だつて?そんなことがあるはずがない!そんなものだけで生きていいけるのなら苦労はしないぞ!」

「失礼な。きちんと砂糖だつて食べているさ!」

「どうやらここに怪物がいるようだ。なんてやつだ・・・! 塩と水と砂糖だけで生きてきたのか!?

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言いませんよ・・・」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

なるほど、そうゆうことか。まあ、それについては明久の自業自得だな。だが、このままほつといたら、いずれ明久が栄養失調で死んでしまう!・・・しようがない。俺の飯をあげるか

「ほら、明久。カロリーメイトだ。食え」

「え!?いいの!?ありがとう!君は命の恩人だ!..」

「まったく、少しは栄養取れよな」

はあ・・・頭が痛い

試合戦争と謎の記憶 やのへ（後書き）

今日は、勉強とこゝ地獄を見せられためになってしまったので、
今日はもうまでもあります。

次は、姫路さんが皆に地獄への切符（姫路さんの弁当）を作つてくれるとこゝにこゝと、試合戦争について書きます。

感想お待ちしております

試召戦争と謎の記憶 その3

「あの・・・明久君?」

「なに?姫路さん」

「・・・もし、良かつたら私がお弁当作つてきましょうか?」

「え?」

なんといつ優しい心を持つて居るんだ!雄一も見習つてほしきくら
いだ!

「明久。良かつたなー女の子の手作り弁当を食べられるんだぞー!」
やましい限りだ・・・」

「幸も、いつかは食べれるといいね!」

「・・・」

「幸?何でそこで黙つちゃうの?ねえ、幸!」

「・・・なんでもない」

「おい幸。何でそこで落ち込むんだ?もしかしてまことに告白して振
られたからか?」

ドス!

「・・・」

「・・・まさか本当に振られたのか!?」

「なんといつか・・・ごめん。幸」

「・・・いいんだ。所詮過去のことだ」

「・・・ふーん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井だけに作つ
てくれるなんて」

俺のことはそつちのけで島田は姫路さんに話しかけた。なんだか面
白くないってかんじの顔をしながら。

「なあ、島田」

「なに?」

「お前も明久に弁当を作つてあげたらどうだ?」

「なつ・・・!」

その瞬間、美波の顔が真っ赤になつた

「おーい、顔が真っ赤だぞ？」

「う、うるせー！……」

「ぬおーま、まで、そこの間接はそっちにまがへンキつたああー……」

「あー……」

「もひ・・・まあ、いいわ。私も作ってきてあげる」

そしてまた俺をそっちのけで話す島田

「え・・・あ、ありがとう島田さん！」

「・・・どういたしまして」
「カアア」

そしてやたらに真っ赤になる島田

「どうしたの島田さん！顔がものすげ赤くなつてるよー。」

「・・・さ、きのせいよ」

「後で保健室につれてつてあげるから

「だから氣のせいだつて言つてゐるでしょー！」

「あたたたた！！！やめて島田さん！一間接が増えちゃつてー。」

「・・・ほんとに明久は鈍感じやのう」

「・・・鈍男」

「・・・そろそろ本題に入つていいか？」

「そこで雄一が話しかけてきた

「ん？あ、そうだった。まだ試合戦争について話をしてなかつたな

「おまえ、腕は大丈夫なのか？」

「ああ、もう治つた」

「回復はやいな！？」

それが俺の体質だ

「雄一」。一つ気になつていたんじやが、びりしてロクラスなんじや
？段階を踏んでいくならEクラスじやうひし、勝負に出るならAク

ラスじやうひ？

「そういえば、たしかにそうですね」

「たしかにそうだが、よく考えてみる。ここにいるメンバー達を」

そこで、明久が口を開いた

「えーっと、ここには親友が一人と美少女一人とバカが一人とムツリが一人いるけど・・・」「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」「雄二、今のお前は最高に気持ち悪かったぞ」「とにかくそのツラかせや」

「・・・（ポツ）」「ムツツリー二まで！？どうしよう、僕だけじゃツツ「ノミきれない！？幸一君もそう思うでしょう！？」

「明久、今俺はお前にかまつていい余裕がないんだ。また後にしてくれ」

「あ！まつてよ幸一！」

すまん明久。俺は正直疲れた。

「まあまあ。落ち着くのじや、代表にムツツリー！」

「そ、そうだな」

「いや、そのまえに美少女で取り乱すことに対し突っ込みを入れたいんだけど」

「明久、それ以上突っ込みいれようとしないほうがいいぞ。疲れるだけだ」

「・・・うん」

わかってくれて何よりだ

「さて、ついさっきのつづきだが、こここのメンバー達がいれば勝利は目前だ」

「どうして？」

「まず、このクラスには姫路がいる。姫路の実力は皆も知っているな？」

「うん」

「姫路に問題ない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる」

「たしかに、姫路さんだけでEクラスに勝てそうだからな」

「Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がな

いつことだ」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとはいえないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

たしかにそうだ。目標はAクラスであってDクラスではない。第一、求めるものが違う。

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、あの！」

姫路さんがいつもより大きい声で話しかけてきた。

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけた、つて・・・吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「それは俺も気になる」

「ああ、それか。それはついさつき、姫路のためにつて明久に相談されて」

「それはそうと！」

そこで、明久が雄二の台詞をさえぎるように大きな声で話しかけてきた。

それはそうと、明久は相変わらず優しいなあ。姫路さんのために試召戦争をやるなんて・・・

「・・・ちょっとといいか？」

「なんだ？」

「・・・ちょっとトイレにいかせてくれ」

「ああ、いいぞ。ほかに話すことはないからな」

「じゃあ、ちょっとといつてくる」

「ふう、すつきりした」

俺は、トイレで用を足して教室へ戻ろうとしていた。

「・・・ん？ あれは・・・優子か。ちょっと話しかけてみるか」

そのとき・・・鋭い頭痛が起きた

「くつ・・・何だこの頭痛は・・・!」

そのとき、どこからか声が聞こえてくる

「・・・は・・・つは・・・・・・とが・・・ぬのは・・・ら・・だりう

・!」

うまく聞き取れない・・・・・さら^ヒ・・・頭痛が酷くなってきた・・

・!

「・・・あ・・・泣きわめけ!・・・!」

そこで、俺は意識を手放した

試合戦争と謎の記憶 やのま（後書き）

「じいじもでんを伸ばすつむつだー?..と黙つてこの方はすみません!..」
つきからロクライスとの試合戦争を書きます

試み戦争と謎の記憶 短編（前書き）

試み戦争と謎の記憶 その3の続きです

試召戦争と謎の記憶 短編

「……ん?」「は・・・どこだ?」

幸は、見知らぬ建物の中にいた

「おいおい・・・俺は学校にいたはずだぞ? なんでこんなとこにいる? 」

「・・・」

すると、後ろの扉が勢いよく開き、見知らぬ人が入ってきた
「はあはあ・・・ここまでくれば大丈夫か?」

「なんだ? あいつは・・・」

「・・・よし、ここなら見つからずにいけそうだ・・・そつそく連れてくるか」

すると、その見知らぬ人は戻つていった

「・・・ほんとなんだつたんだ? あいつ

すると、またその見知らぬ人がきた・・・小さな女の子を連れて
「へへへ・・・この人質を使えばたんまり金をもらえるってわけだ。
・・・こんなおいしい話はないぜ」

「・・・なんだと?」

「おい! そこのごみ野郎! !

俺は、その誘拐犯に話しかけた

「さて、こいつを・・・そうだな、あの真ん中のところに一度いい
のがあるな。あそこに縛り付けるか」

そういう、俺のところに向かってきた

「おい! ちょっと来い
」

と、掴みかかるとして

スッ

すり抜けていった

「・・・は?」

・・・いつたい俺の体に何が起きたんだ？これが幽体離脱つてやつか！？

「いやいやーそんなはずはない！第一、俺死んでないぞ！」

そのとおり、急に田の前が暗くなつた

「・・・ん？」

気がつくと、俺は保健室のベッドの上に横たわつていた

「今のは・・・夢だつたのか」

「あら、目が覚めたのね」

不意にベッドの横から声がした。その声の主を確認しようと

「・・・なんだ、優子か」

「なによ、せっかく看病してあげたのにその態度は

「すまんすまん。ありがとう、優子」

「どういたしまして」

おっと、そうだった

「はやくFクラスにいかないと」

「あら、もういっちゃんの？」

「ああ、じゃあな優子」

試召戦争と謎の記憶 短編（後書き）

えー、更新が遅れてしまい、すみません。
テスト勉強などで忙しかったのでなかなか書けなかつたです。
今日もちよつと予定がたくさんあるのであんまり書けません。
なので、じんせいじん 試召戦争について書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418v/>

バカと謎と記憶消失

2011年10月10日03時57分発行